

# 藤原道長家族の葬送について

## The Funeral of Fujiwara Michinaga's Family

栗原 弘

Hiromu KURIHARA

前稿の「藤原行成家族の葬送・追善仏事・忌日について」に引き続いて、同時代の政治家である藤原道長家族の葬送について分析した。本稿では道長の祖父母の世代から子供の世代までの家族成員の葬送についての基礎的な史実を明らかにすることを重点としている。墓制や追善仏事について別稿を参照のこと。

キーワード：藤原道長，葬送，平安時代

Fujiwarano Michinaga, funeral, Heian period

### はじめに

家族という視点から、葬送と追善仏事を分析するとどのようなことが言えるのかという関心の下に、前稿において藤原行成家族の葬送と追善仏事について分析した<sup>(1)</sup>。本稿ではそれにつづいて同世代の人物である藤原道長家族を対象として取り上げより理解を深めることを目指したい。道長家族については言及すべきことが多いので、本稿では道長家族の葬送の基礎的な事実を明らかにしておきたい。

### 1 道長・源倫子の祖父母・外祖母・父母の葬送

まず、道長と倫子の祖父母と外祖母母そして父母の葬送をみることにしたい。道長の祖父母（師輔・藤原盛子）についてみると、祖父の師輔は平安時代の政治家として重要な人物であるが、葬送に関する史料はみあたらない。一方、祖母の藤原盛子（父経邦，真作流）についても葬送の史料はみられない。

次に、外祖母（藤原中正・不詳女）についてであるが、二人についても、葬送の史料は残されておらず、ここで検討することができない。

次に、父母（兼家・藤原時姫）についてみていこう。兼家は正暦元年(990)7月2日東三条第<sup>(2)</sup>で死去した。62歳であった。兼家が死去すると、喪中の間、遺族は「東三条院の廊・渡殿を皆土殿にしつつ、宮・殿ばらおはします<sup>(3)</sup>」と、東三条院の渡り廊下の板敷きを取り除いて土間にしてそこに籠った。ただし、『大鏡』（兼通）によれば、子供の道兼は父兼家と何か確執があったのか、土殿に籠らず、夏の暑さにかこつけて、御簾も巻き上げて、念誦などもせず、人々をあつめ『古今和歌集』などを広げて、遊び戯れ、父親の死を少しも悲しまなかったという。しかし、道長や道綱は定めどおり、追善供養を営んだと伝えている。

兼家の葬送は7月9日に行われた<sup>(4)</sup>。場所は鳥部野の北辺であった。『本朝世紀』に「撰政大臣葬送也、…鳥部野北辺也、七大寺并諸寺等、各唱念仏、依例弁少納言外記史、率史生左右史生官掌召使等、参彼葬送之山辺、献厨家酒肴、是故実也」とある。『古今著聞集』（巻第13）に、「法興院入道殿かくれさせ給て、御葬送の夜、山作所にて萬人騒動の事ありけり。町尻殿おどろかせ給て、御往反ありける。御堂殿は、すこしもさ

続柄	名前	没年	年齢	火葬地	墓地
祖父	師輔	天徳4年(960)5月4日	53歳		
祖母	藤原盛子	天慶6年(943)9月12日			金龍寺?
外祖父	藤原中正				
外祖母	不明				
父	兼家	正暦元年(990)7月2日	62歳	鳥部野	木幡
母	時姫	天元3年(980)1月21日			木幡
本人	道長	万寿4年(1027)12月4日	62歳	鳥部野	木幡
正妻	源倫子	天喜元年(1053)6月11日	90歳	広隆寺乾原	仁和寺
妻祖父	敦実親王	康保4年(967)3月2日	75歳		仁和寺
妻祖母	藤原時平娘				
妻外祖父	藤原朝忠	康保3年(966)12月2日	57歳		
妻外祖母	不明				
妻父	源雅信	正暦4年(993)7月29日	74歳		仁和寺
妻母	藤原穆子	長和5年(1016)7月26日	86歳		観音寺霊屋
子供	頼通	承保元年(1074)2月2日	83歳	栗小馬山?	木幡
子供	頼宗	治暦元年(1065)2月3日	73歳		
子供	能信	治暦元年(1065)2月9日	71歳		
子供	顕信(出家)	万寿4年(1027)5月14日	34歳		
子供	教通	承保2年(1075)9月25日	80歳		
子供	長家	康平7年(1064)11月9日	60歳		
子供	長信(出家)				
子供	彰子	承保元年(1074)10月3日	87歳	大谷口本院	
子供	妍子	万寿4年(1027)9月14日	34歳	大谷寺北	木幡
子供	威子	長元9年(1036)9月6日	38歳	園城寺北地	
子供	嬉子	万寿2年(1025)8月5日	19歳	船岡西野	木幡
子供	盛子				
子供	寛子	万寿2年(1025)7月9日		岩陰	
子供	尊子		85歳?		
子供	女				
頼通妻	隆姫女王	寛治元年(1087)11月22日	93歳	鳥部野	
頼宗妻	藤原伊周娘				
能信妻	藤原伊周娘				
教通妻	藤原公任娘	万寿元年(1024)1月6日	24歳		木幡
長家妻	藤原行成娘	治安元年(1021)3月19日	15歳		観隆寺霊屋
	藤原斉信娘	万寿2年(1025)8月29日			法住寺霊屋
彰子夫	一条天皇	寛弘8年(1011)6月22日	32歳	岩陰	円融寺
妍子夫	三条天皇	寛仁元年(1017)5月9日	42歳	船岡山	北山陵
威子夫	後一条天皇	長元9年(1036)4月17日	29歳	浄土寺西原	菩提樹院陵
嬉子夫	後朱雀天皇	寛徳2年(1045)1月18日	37歳	香隆寺乾原	円乗寺陵
盛子夫	三条天皇	寛仁元年(1017)5月9日	42歳	船岡山	北山陵
寛子夫	小一条院	永承6年(1051)1月8日	58歳		
尊子夫	源師房	承保4年(1077)2月17日	70歳	雲林院?	北白河

わがせ給はで、人々に尋きかせ給て、「馬のはなれたるにこそ」と仰られけり。」とあって、鳥部野の葬送の時何か騒ぎがあったことを伝えているが、詳しくは分からない。兼家の遺体は鳥部野で火葬に付され、遺

骨は木幡へと運ばれた<sup>(5)</sup>。

次に、兼家の妻時姫については葬送の記録は残されていない。

以上、道長の祖父母・外祖父母・父母六人の葬送に

ついてみた。いずれも、史料不足で残念ながらその実態については充分解明できない。

では次に、道長の妻源倫子の祖父母・外父母・父母の葬送についてみることにしよう<sup>(6)</sup>。まず、倫子の祖父母（敦実親王・藤原時平娘）と外祖父母（藤原朝忠・不詳女）の葬送に関してはいずれも史料が残っていない。

次に、倫子の父母（源雅信・藤原穆子）の世代をみていこう。父親の源雅信については葬送の史料は残されていない。一方、母親の穆子は実態がかなり明らかになる。

穆子は夫の雅信が死去（正暦4年〈993〉）した後、出家をして一条殿に住んで「一条尼上<sup>(7)</sup>」と呼ばれていたが、長和5年（1016）7月26日、86歳で死去した。遺言によってその夜に棺に入れられた。そして、8月1日遺体は東山の観音寺<sup>(8)</sup>に移された。同日条の『御堂関白記』に「今日一条尼上渡観音寺、是存生作置舎所也」とある。ここでいう「存生作置舎所」とは、6年前の寛弘7年（1010）9月29日条に「一条尼上観音寺作無常所、修小法事・女方（倫子）参堂、四面指廂」とある建物のことだと推測され、遺体を納めるためのいわゆる霊屋<sup>(9)</sup>のことであろう。つまり、穆子は生前に自らが霊屋を建ており、彼女の死後そこへ安置されたのである。

『栄花物語』（巻第12）によれば、穆子は、「あがみかどの御事始に、かくなりなむ事の、折しも口惜しき事。さはれ、さるべきやうにて暫は山寺に納め置かせ給へれ。雲煙とも、この世の大事の後に心安くさせ給へ」という遺言をしていたという。つまり、自分の死を自覚していた穆子は、この年の1月に即位したばかりの後一条天皇にはばかって、「自分の死の喪を秘し、適当な処置をして、当分は観音寺に遺体を納め、御禊や大嘗会の終わった後に葬式をするように」という遺言であった。そこで、母親の意を汲んだ、娘の倫子は穆子の死去の後、葬式はせず、穆子自身が造っていた霊屋に一旦遺体を納め、時の過ぎるのを待つことにしたようである。

3年後の寛仁3年（1019）の9月頃に、倫子は母親の穆子を改葬したようで、『栄花物語』（巻第16）に「大殿の上、一条殿の尼上をば、観音寺といふ所にこそは斂め給ひしか、それをこの頃とかくし奉らせ給ひて後は、忌ませ給へば」とある。残念ながらこれ以上の史料はみあたらず、穆子の遺体は改葬の際どのような処遇を受けたのか、何処へ運ばれたのかなどについては

知ることができない。

## 2 道長夫婦の葬送

では次に、道長夫婦の葬送についてみていきたい。まず、道長は寛仁3年（1019）54歳で出家した。その年の7月には法成寺の建設に着手し、治安2年（1023）には金堂と五大堂が竣工し、彼は来世への準備を滞りなく完成させた。晩年、道長は多くの近親者の不幸に見舞われた。万寿2年（1025）には娘の寛子と嬉子が亡くなり、万寿4年（1027）には顕信と妍子を失った。同年10月28日に、妍子皇太后の四十九日の法事が法成寺で行われたが、心身が衰弱していた道長はその夜から床に伏した<sup>(10)</sup>。病勢は日を追って悪化した。

11月25日には、阿弥陀堂に移りそこに身を横たえた。12月2日の夜中は苦しみの余り、医師の但波忠明が呼ばれ、背中の腫れ物に針を刺して膿汁を出したところ、道長は「吟給声極苦気也者<sup>(11)</sup>」という状態であった。そして、4日には、立ててあった屏風の西側をあけ、手には蓮の糸から作られた村濃の組紐を九体の阿弥陀仏の手を通し、それが中尊仏より道長の手へ渡された。道長は、多くの僧たちの誦経の中、五色の糸を握り締め、極楽浄土に思いをはせて亡くなった。62才であった。

お棺は道長が病気になった日から作られていたとあるから、誰の采配であったのか、道長が死去する前に造られており<sup>(12)</sup>、死去した翌日、入棺された。陰陽師を召し、葬送の諸行事を占わせた結果、葬送は7日の夜、場所は鳥部野と定められた<sup>(13)</sup>。『小右記』万寿4年12月7日条に「今夜前太政大臣禅閣於鳥戸野葬送」とあるように、葬送は夜に行われた。夕暮れに道長の御棺は車に乗せられ、法成寺から鳥部野に移送された。式場には七大寺・十五大寺の僧が集り、導師は天台座主の院源であった<sup>(14)</sup>。同書によれば、葬礼に参集した卿相は大納言藤原原信、前中納言藤原隆家、中納言藤原実成、権中納言藤原朝経、同源師房などであった。

葬送儀式の終了とともに遺体は茶毘に付された。翌日の夜明け方に、「殿ばら・さべき僧<sup>(15)</sup>」によって、骨が拾われそして瓶に入れられ、権左中弁藤原章信（元名の孫）が首に懸け、定基小僧都（前浄妙寺別当）が伴って遺骨は木幡に送られた。

次に、源倫子についてみたい。倫子は父方の資質（祖父75歳・父74歳）を受け継いでいた故か、当時としては破格の長命に恵まれ、天喜元年（1053）6月11

日90歳で死去した。道長が死去してから26年後のことであった。15日に、藤原頼通によって漏刻博士が召され、入棺・葬送のことが決定され、その日の昼の12時頃から御棺が作られ、夜中の12時ごろに入棺された。葬送は22日に行われた。遺体は車に載せられ（推測）東洞院大路を北に進み、土御門大路を西に折れ、さらに一条大路を西に進み、西京を経て葬送の地へと運ばれた<sup>(16)</sup>。『大鏡』裏書によれば、そこは「広隆寺乾原」であった。

後年、藤原忠実の言談を記録した『中外抄』(61)に「我(忠実)、先年故殿(忠実の祖父師実)の御共に法輪寺に参りし時、小松の有りに、馬を打ち寄せて手を懸けむとせしかば、故殿の仰せて云はく、「あれは鷹司殿(倫子)の御葬所なり。そもそも墓所には御骨を置く所なり。所放也。葬所は鳥呼事なり。また骨をば祖先の置く所に置けば、子孫繁昌するなり。鷹司殿の骨をば雅信大臣の骨の所に置きて後、繁昌す」と云々とある。これは、忠実が祖父の師実に連れられて嵐山の法輪寺へ行く途中に、広隆寺の近くで倫子の葬送の地を教えられたこと述べているのである。倫子が死去した天喜元年に、師実(倫子の孫)は12歳であり、祖母の葬式を記憶していたのであろう。倫子の遺体はそこで茶毘に付され、遺骨は実父源雅信の墓地のあった仁和寺の北に埋葬された<sup>(17)</sup>。

### 3 道長の子供の葬送

本章では道長の子供の世代の葬送についてみていきたい。まず倫子腹の男子をみていこう。長男の頼通は晩年には宇治の平等院に住み、延久4年(1072)に出家し、承保元年(1074)2月2日83歳で没した。『百鍊抄』同日条に「宇治前太政大臣薨。葬所」とあり、『扶桑略記』同日条に「宇治前大相府薨、年八十三」とある。いずれも非常に簡略な記述である。頼通は道長の後継者であり、平安時代で最も有名な政治家の一人でありながら、葬送の史料はほとんど残されていない。『栄花物語』にも具体的な記述が見られないから、頼通は宇治の平等院で死去し、その近辺で火葬されたことが推測される以外、これとって記述することができない。

道長には頼通以外にも、倫子腹に教通、明子腹に頼宗・能信・顕信・長家などたくさんの男子がいる。ところが、彼らの葬送に関する史料はほとんどみあたらない。そこで、男子については検討を断念し、女子についてみることにしたい。

まず、倫子腹の彰子をみることにしよう。彰子は、頼通が亡くなった同じ年の承保元年(1074)10月3日、87歳という高齢で死去した。場所は父親の道長と同じ法成寺阿弥陀堂であった。即日入棺のことがあった。葬送は6日に「大谷」という所で行われた<sup>(18)</sup>。『勘仲記』正応5年(1292)9月10日条の記録によれば、「東山大谷」とあるから、大谷とは鳥部野の北辺にあった大谷の地と想定される(後に見る、妍子の火葬の地とほぼ同地であろう<sup>(19)</sup>)。彰子はそこで火葬された<sup>(20)</sup>。その後、遺骨が何処へ運ばれたのか明確でない。

彰子が亡くなった際、白河天皇は関白の教通に御禊を目前に控えているから「な籠らせ給ひそ(今は喪に籠もってはいけない)」と命じたが、教通は「いみじき事あちとも、いかでかこの度の御事を仕まつらではあらん(どのような世の大事があろうとも、彰子の葬送の事を奉仕しないでおられようか)<sup>(21)</sup>」と天皇の命令を拒否し、喪に籠もった(『栄花物語』巻第39)。長寿であった同母のキョウダイの頼通と彰子を同じ年に失い、最後に残された教通(79歳)は、関白でありながら、もはや国家の大事よりも肉親の大事を優先させた(ちなみに教通は1年後に死亡)。教通は葬送の日、彰子の遺体を乗せた霊柩車の後から歩いてお供をし、葬送の地大谷に向かったのである。

では次に、妍子・威子・嬉子の三人の姉妹についてみていこう。3人の中で妍子と嬉子は父道長より先に死去しており、史料の豊富な時期でもあり、葬送の史料が詳細に残されている。まず、妍子である。妍子は、没年・火葬地・墓地・四十九日・一周忌すべて判明している。道長家族の中でこの5つの史料が残っているのは兼家・道長・嬉子だけであり、葬制・追善仏事・墓地の資料が最も整っている人物である。

妍子は万寿4年(1027)9月14日に死去した<sup>(22)</sup>。前日には危篤になり、午後2時頃出家をした。切られた髪は6尺ほどの長さであったという<sup>(23)</sup>。そして、午後4時ごろ容態が急変し死去した。『小右記』によると、妍子の枕元には道長・倫子・頼通・教通・頼宗などがいた<sup>(24)</sup>。道長は、息絶える妍子に対し「老たる父母を置きて、いづちとておはしますぞや。御供に率ておはしませ(年老いた父母を残して何処へ行ってしまうのか。私をお供につれて行きなさい)」と声を上げて泣いたと、『栄花物語』(巻第29)は伝えている。落胆して臥していた倫子に対して、頼通がお薬を差し上げたという。

家族の者が亡くなると、葬送その他の段取りをし

なければならない。平安時代は儀礼の日時には非常に神経質であったから、適切な日時・場所はすべて陰陽師に尋ねその後に決定された。妍子の時は、暦博士の賀茂守道と呼ばれた<sup>(25)</sup>。彼の占いによって、葬送の日は16日と決まった。14日に死去し、2日後には葬送であるからかなりあわたましい日程であった。場所は守道が葬送の地として「祇園の東、大谷と申して広き野<sup>(26)</sup>」を推奨しており、『小右記』がこれを「大谷寺北、栗田口南<sup>(27)</sup>」と記録しているから、前述の彰子と同じ鳥部野の北辺の大谷の地であったと考えられる。

葬送の当日、官司やしかるべき縁故の人々が参集し、葬送の準備に携わった。夕方、頼宗や能信や長家、そして妍子の乳母子の藤原惟経や家司の藤原惟憲などによって、入棺が行われた。その棺の中には道具類が入れられた。御棺は糸毛の車に乗せられ、明るい月光の下を鳥部野の地へ向かった。道長は車のお供をしようとしたが、歩行が困難であったため周囲の者に肩をかけてもらい歩いて従った。内大臣の教通以下が相従った。女房達も6両の車に乗ってお供をした。頼通は「衰日」のため随行できなかった。

葬送の地は広い野となったところであった。儀礼は夜中になって始まり、仏前に供える御膳の役は乳母と縁故の深い女房達が奉仕した。未明に火葬され、夜明け方に式はすべてが終わった。朝の8時頃、遺骨は皇太后宮権亮藤原頼任が肩に懸け、大僧都永円などが伴い木幡へ納められた<sup>(28)</sup>。

次に威子についてみたい。威子は長元9年(1036)9月6日に夫の後一条天皇の後を追うようにして亡くなった。その年の夏に流行し始めた天然痘に罹り、9月3日(4日とも)に出家し、その3日後に死去した。38歳であった<sup>(29)</sup>。彼女の葬送についての詳細な史料は残されていない。ただ、死去後、死者にお膳が供えられたようで、その際の様子を『栄花物語』(巻第33)に記録されている。それによれば、母屋の御簾を少し上げて、威子の霊前にお膳をお供えしている。この時のお供え役は命婦の君で、左衛門の内侍・侍従内侍・出羽弁などが取り次いでお供えしている。彼女達は、威子が生きている時にお給仕を世話していた女房達よりも階級の上の者であったと記録されているから、死者に供えるお給仕役は特別であったことが判明する。前述した妍子の葬送の際のお膳役の女房と併せて参考とすべきである。

また、頼通は威子の同母キョウダイであるから、当然喪に籠もらなければならない立場にあった。ところ

が、彼は関白左大臣の要職にあったため、公務に差し支えが出るので喪に籠もらず、10月の大嘗会の御禊の奉仕を行っている<sup>(30)</sup>。先述したように、彰子が亡くなった際、白河天皇が当時の関白教通に御禊を目前に控えているから「今は喪に籠もってはいけない」と命じたが、教通は天皇の命令を拒否し、喪に籠もったことと対照的である。

さて、威子の葬送の詳細については伝わっていないが、『大鏡』裏書に「九月十九日奉葬園城寺北地号桜本」とある。葬送の地は「園城寺」であったとされている。しかし、この時代に藤原氏の基経流の死者が園城寺へ移送されたという記録はみあたらないから、威子の葬送の地は園城寺であったとは考えがたい。この「園城寺」とは三井寺のことではなく、「園」は「圓」の誤写であって、円成寺(円城寺)のことであろう。この円成寺は東山の西麓に所在し、現在の左京区鹿ヶ谷辺にあった<sup>(31)</sup>。鹿ヶ谷辺は「桜本」とも呼ばれる所であり<sup>(32)</sup>、『大鏡』に「号桜本」とあるのはこのことを指していると考えられる。つまり、威子の葬送の地は円城寺の北辺の桜本と呼ばれた所であったであろう。

そうすると、威子の夫の後一条天皇の葬地は「浄土寺西原(神楽岡東面)<sup>(33)</sup>」であったから、この地は「円城寺北地」と近接している。恐らく、威子は彼女より5ヶ月前に死去した後一条天皇のすぐ近くで場所葬送されたのであろう。火葬であったと推測されるが詳細は不明である。墓地についても、史料が残されていない。

次に、嬉子の場合をみていこう。嬉子の葬送史料は道長家族で最も詳細に明らかになる。嬉子は父道長42歳、母倫子44歳の時の子供で、15歳で東宮敦良親王の妃となった。19歳の万寿2年、妊娠中に赤裳瘡に感染した。同年8月3日親仁親王(後冷泉天皇)を出産したが、病気が悪化し、5日に上東門院第で急死した<sup>(34)</sup>。父親の道長は先月にも寛子(後述)を失ったばかりで、立て続けに二人の娘を失ったのである。遺体の傍らには道長・倫子・頼通・教通がいて、嘆き悲しんだ<sup>(35)</sup>。ここでも、嬉子の周辺には同母のキョウダイが記録されていて、異腹の明子腹のキョウダイは一步下がった位置にあったようである。

嬉子は、午後の2時から夕方にかけて亡くなったようであるが、その日は夜になるにつれて雨脚が激しくなったが、道長は嬉子の非常事態に耐え切れず、陰陽師の中原恒盛(常守)に命じて、上東門院の東対の屋根の上に昇らせて「魂呼(魂喚)」を行わせた。この

魂呼とは、死者の横たわっている家の屋根に死者の着物を持って昇り、抜け出たばかりの魂を北の方向に向かって三度招くように呼び戻す呪法である<sup>(36)</sup>。藤原実資は魂呼を「近代不聞事也<sup>(37)</sup>」と書き記している。この呪法は道長の時代でもほとんど行われていないことであった。それを道長があえて行ったということは、道長の悲嘆が非常に大きかったことを意味している。

翌6日、夜明けとともに、陰陽師の安倍吉平（晴明の男、72歳、当時の大家）が呼ばれ、葬送の際のしかるべき事が決められた。対応は頼通が行った。道長は茫然自失の状態であったからである<sup>(38)</sup>。その結果、6日の夜に遺体を法興院へ移すことになった。早速、道長の車を霊柩車とすることになり、車に喪の飾り付けが行われた。嬉子はお産の後に亡くなったことであり、体が汚れていることもあって、お湯を浴びせ体を清めた。この役目は乳母の小式部（不詳女）が担当した。この時、道長・倫子夫婦は「自分達を残して何処へ行くのか」と嬉子に語りかけ涙を流したという。遺体を湯浴みさせた後に着物を着替えさせた<sup>(39)</sup>。

また、この日は御棺を造るには忌む日であったので、二人の僧侶に別々に造らせ、清通法師の造った方を用いたという。夜中の12時頃に（『左経記』）遺体がお棺の中に納められた。そして、蓋がしっかりと閉ざされた<sup>(40)</sup>。遺体は上東門院第からそう遠く離れていない法興院へ移送された。道長は嬉子の車の後から歩いてお供をしようとした。しかし悲しみの余り歩行も満足にできない有様で、片手は頼通が、もう一方は三井寺の僧都が抱え、腰を教通が後押ししたという。道長に続いて多くの上達部・殿上人が歩いて従った。近習の女房達は車三両に乗って従った<sup>(41)</sup>。倫子は、その葬列には加わらなかった（ただし倫子は10日に非公式に法興院に渡っている）。当時、死者の女性の親族は葬送・葬列・移送の正式な列には加わらないのが慣行であったからである。また、夫の敦良親王も東宮であるから、手紙のやり取りはあっても、敦良が妻方の里第へ来て、葬式に参加するということはない。これは天皇とその妻との関係も同様である。

遺体は、車ごと法興院の北の僧坊に安置された。女房達は嬉子が存命中と同じように伺候し、お膳などのお給仕は乳母の小式部が泣きながら奉仕をした<sup>(42)</sup>。遺体は9日間法興院へ安置された後、8月15日の夜船岡の西野（岩陰）で葬送されることになった。その日の早朝検非違使が集められ、行路（京極から北行

し、一条から西行）が前もって修理され払い清められ、葬送に必要な物品が全て岩陰に運び込まれた<sup>(43)</sup>。法興院から岩陰までは遠いということから、出発は夕方方の6時になった。遺体を乗せた車が出発すると、それに歩いてお供をしたのは道長・教通・藤原行成・藤原頼宗・能信・藤原兼隆・藤原定頼・藤原広業・源朝任などであった。ただ、関白の頼通は衰日ということで参加しなかった。葬送の式は岩陰の地で行われ、嬉子はそこで火葬された<sup>(44)</sup>。遺骨は乳母子の藤原範基が首に懸け、定基僧都が付き添って木幡墓地へ送られた<sup>(45)</sup>。遺族は墓地の木幡へは同行しなかった。それがこの時代の習慣であったからである。

次に、道長のもう一人の妻明子腹の娘であった寛子の葬送を見ていこう。寛子は元の皇太子であった敦明親王（小一条院）と結婚した。二人の結婚は典型的な政略結婚で、敦明は、もともと藤原顕光の娘延子と幸せな結婚生活をしてきた。しかし、道長は自分の政治的な野心を実現するために、敦明に対して皇太子の地位を強引に辞任させ、その代償として敦明を準太上天皇とし、我が娘寛子を与えたのである。寛仁元年(1017)11月のことであった。

この事態に落胆した延子は嘆き悲しみ世を去った。8年後の万寿2年(1025年)7月9日寛子は、その頃流行していた赤裳瘡に感染し死去した。当時の人々は、寛子の死を顕光と延子親子の怨霊の仕業であったとした<sup>(46)</sup>。

寛子夫妻は最初寛子の母親邸の高松殿に居住していたが、高松殿が焼失したために道長が買得した山井第に転居し<sup>(47)</sup>、寛子はそこで重病となった。7月8日に、夫の小一条院は妻の寛子が道長に「今一度見奉らん（最後に一目お会いしたい）」と言っていると伝えると、道長が山井第に渡ってきた（『栄花物語』巻第25）。皆は最期を覚悟し、寛子を出家させることになった。髪を剃って尼にしたのは入道の顕信であった。重病人の周りにいたのは、夫の小一条院、父親の道長、母親の明子・同母キョウダイの顕信・頼宗・能信・長家であった。

実父の道長は、娘の危篤にもかかわらず、嬉子（正妻の子供）が妊娠中で里下がりしているのです。その面倒を見なければならぬということで、寛子のことは最期をみることはできないで、「見捨てたてまつる」と、泣く泣く山井第を去っていった。寛子は翌朝亡くなった。その死は使いの者によって道長に知らされた。お葬式は、2日後の11日ということになった<sup>(48)</sup>。

11日の夕方、寛子の遺体は車に乗せられ山井第を出発し、岩陰の地へ向かった。行列の先頭には松明が一つ点さただけであった。霊柩車の付き人の動向を見ると、寛子の車のすぐ後ろから徒歩でお供をしたのは夫の小一条院であった<sup>(49)</sup>。父親の道長は体調が悪いということで葬送にも加わらなかった。『左経記』は車のお供をした人物について、「山送人々権大納言能信・権中納言長家、是兄弟也、自余男女以侍候云<sup>(50)</sup>」と、寛子の同母の能信と長家がお供をしたと記録している。異母キョウダイの頼通（関白左大臣）と教通（内大臣）の動向は明確でない。しかし、『左経記』の記述から理解できるように、同書が当時の関白左大臣と内大臣を差し置いて、権大納言や権中納言のみを書き記すとは考えにくいので、恐らく、頼通と教通はお供には加わらなかったであろう。

岩陰の地で寛子の遺体は火葬に付された。火葬後の遺骨の処遇については史料が残されていない。

さて、寛子の葬送全体で問題としたいことは、この葬送の主催者は誰であったかということである。主催者の有資格者は寛子の父親の道長か夫の小一条院のどちらかである。『栄花物語』に、「はかばかしくもおぼし掟てさせ給ふべくも見えさせ給はず」とあり、主催者と思われる人物は、葬送の当日心が動揺して葬送の指図ができなかったと記述されている。同物語はその人物を明確にしていないので道長であったのか、小一条院であったのか明確でない。

松村博司氏は小一条院であろうとしている<sup>(51)</sup>。支持すべき見解である。その理由として、『栄花物語』は寛子の葬送に関しては小一条を中心に描写しており、道長が主体者としては描かれていないこと、そして、道長は体調が悪いことを理由に野辺送りに加わっていないことがあげられる。また、習俗として重要なことは、遺体を移送する霊柩車が小一条院所有の車（嬪子の時は道長の車が霊柩車とされた）であったことに象徴的に表されており<sup>(52)</sup>、小一条こそ、寛子の車の直ぐ後ろについて従った人物であることである。つまり、寛子の葬送の主催者は小一条院であったであろう。

#### 4 道長の男子の妻の葬送

では次に、道長の男子達の妻の葬送についてみていこう。まず、頼通の妻隆姫女王を取り上げよう。隆姫は寛治元年（1087）11月22日に没した。93歳という異例の長寿であった。夫の頼通は13年前の承保元年（1074）83歳で亡くなっていた。二人の間には子供が

いなかった。隆姫は亡くなった時、自分の両親はもとよりキョウダイも夫も全て亡くしていた。しかも、子供がいなかった。このような場合、誰が葬送全般の責任者となるのであろうか。通常は、隆姫の父方の血縁者の誰かが責任者になったと思われる。隆姫の場合は隆姫の弟師房の男子源俊房（隆姫からはオイ、父方の最高位者）が責任者となった。『栄花物語』（巻第40）に「左の大殿（俊房）よろづに扱ひ申させ給ふ」とある。

葬送は12月7日鳥部野で行われた<sup>(53)</sup>。葬送の全般を俊房が取り仕切ったのであろう。隆姫は、摂関家の嫡男頼通の正妻であったとはいえ、年月は過ぎ去り、彼女の死は道長の死から60年後のことで、道長の子供の世代では恐らく最後まで生き残った人物であった。隆姫の場合は死亡年月日と葬送の地のみが明らかになり、葬送の詳しい様子や墓地については史料が伝わっていない。

次に、教通の妻について取り上げたい。教通の妻は藤原公任の娘で、二人の間には子供が数人生まれた。そして、治安3年（1023）妻はまた妊娠したため、二条第から三条にある藤原登任の第宅へ移った。そこは、妻がいつも安産できる縁起の良い家であったからである。しかしこの度は、年末に無事男子を出産した後、産後の肥立ちが悪く、年が明けるとすぐに亡くなった（万寿元年1月6日）<sup>(54)</sup>。24歳であった。

公任娘が危篤となり急逝する事態に参集した人々を見ると、重態の時に妻の弟の藤原定頼がみえ、死去すると同時に実母（昭平親王娘）が遺体を抱き上げ横に寝かしつけている。その近くで、夫の教通と妻の実父の公任が大声を上げて泣いていた。もちろん子供達もその傍で泣いていた<sup>(55)</sup>。要するに、教通の妻の死の周辺には妻方の親族のみが参集し、夫方の親族は誰一人として見当たらない。夫方の両親である、道長と倫子は息子の妻の所へ直接出向いて来る様子はなく、手紙のやり取りで間接的に関与するのみである。

葬送は1月14日に行われた。夕暮れに、夫の教通の車を霊柩車とし車輪に絹の布を巻きつけて装飾を施した<sup>(56)</sup>。車の準備ができると、車を寄せてお棺を車に乗せた。教通の妻の葬送では、お棺を担いだメンバーが判明する。『栄花物語』（巻第21）に「さて御車寄せたれば、殿（教通）・大納言（公任）・内供の君（良海、妻の兄弟）など、むつまじくおぼす人などしてかき乗せ奉り」とあるように、夫や妻方の父親や兄弟など、死者に最も親しい男性の親族成員がお棺の引き出しの役割をしていた。

お棺が靈柩車に移されるといよいよ三条の登任の第宅から葬送の地（不明）へと向かった。車の後ろには教通と公任が藤衣を着て従った。定頼もお供するべきであったが、彼は当日が忌日であったため参加しなかった。これ以外の参加メンバーは明確ではないが、教通の両親の道長夫婦が出席したのであれば、『栄花物語』が書き漏らすとは思えないので、彼らは出席しなかったと推測される。したがって、妻が死去した場合は、葬送の列でも妻方の親族が中心となり、原則的に夫方の親族は参加しなかったと考えてよいであろう。

さて、公任娘の遺体は不明地で火葬されたが、その後について『栄花物語』（同巻）は「御骨は内供の君、さるべき人人具しておわす」と記述している。これについて松村氏は「御骨は内供の君が持ち、然るべき人々を供に従えて第へお歸りになる」という現代語訳をし、「語釈」の個所で「御骨は…御骨は内供の君が持ち、然るべき人々を供に従えて第へ歸られた。ただし、「具して」の下、富岡甲本は、「こはたへおはす」となっている。中宮安子の場合、東三条女院詮子の場合など、葬儀の後木幡へ赴いているが、ここは確証が得られない<sup>(57)</sup>」と言っている。松村氏は、この個所については十分な確証がないまま、公任娘の遺骨を内供の君が邸宅の方へ持って帰ったと解釈している。

しかし、筆者の調査では、火葬後の遺骨を自宅へ持ち帰ると言う事例はみられず、平安時代にそのような慣習があったとは考えられない。平安時代にはまだ仏壇などという設備は成立しておらず、穢れに対して非常に神経質であった貴族が、遺骨と言う典型的な穢れ物をわざわざ邸宅内へ持ち込むなどと言う非常識な行為があったとは考えられない。この個所はやはり富岡甲本が「こはたへおはす」となっているように、火葬の後遺骨は木幡に運ばれたとするのが正しいと考えられる。

次に、長家の妻を取り上げよう。長家は若くして、二人の妻を次々と失った。まず、寛仁2年（1018）、長家（14歳）は藤原行成の娘（12歳？）と結婚した。最初の妻は病弱な体質であったようで、治安元年（1021）の春から夏にかけて疫病が流行した際、罹病し早世したようである<sup>(58)</sup>。『小右記』によれば、3月19日の明け方のことであった。長家はわずか17歳であったから、妻の父（行成）や母（源泰清娘）が死者を見守っていた。長家の実父（道長）や実母（源明

子）は手紙で連絡はするが、息子の妻の死の席に参集することはなかった<sup>(59)</sup>。

葬送は4月9日に行われ、『栄花物語』によれば、遺体を北山に送り出す時、長家は靈柩車のお供に付くことを当然としたが、その日は父親の道長が忌の日であった故に、舅の行成が強いて押し止め（父親が忌の日で息子に支障が出るという根拠は不明）、北山には行成がお供として行ったという。その時、行成は北山にさまざまな調度品を運び入れたとあるから、それらは葬送の場の飾り物として設置されたのであろう。遺体は北山の観隆寺<sup>(60)</sup>の北辺に造られた霊屋という建造物に納められた<sup>(61)</sup>。

春に妻を亡くした長家には、秋になるとすぐに結婚話が持ち上がり、11月には再婚したようである<sup>(62)</sup>。4年後の万寿2年（1025）に長家は赤斑瘡に感染したものの回復した。ところが、夫の病気に妻が感染した。妻は妊娠7～8ヵ月ほどであったが、病は日々重くなり、8月27日には男子を早産したが、死産であった。直後に危篤となり、母親（斉信妻）も尼となって娘の危急を支援した。わずかに小康を保ったが29日には死去した。

死者の周囲には妻方の両親と夫がおり、主としてこの三人が死者を悲しむ中心人物であった。夫方の両親はといえば、手紙による交流のみがあって、死の事実を知っても、彼らが息子の妻の死の席に参集することはない。道長は手紙によって斉信娘の死を知らされると、自身も最愛の嬉子を失ってまだ1ヶ月と経たない身であったから、「大納言いかに思ひ給ふらん（大納言はどのように思っておられるだろう）」<sup>(63)</sup>と同情し食事もとらず涙を流したという。

悲しみの中で夜が開けると、陰陽師を呼んで葬送のことについて占いをさせた。それによって、9月15日の夜に遺体を法住寺に移し、9月27日に遺体を納めることが決定された。斉信娘の葬送については、『小右記』などにも記録されていないので、詳細については『栄花物語』（巻第27）による外はない。問題は葬送の日は何時で、遺体は最終的にどのように処遇されたのかである。『栄花物語』によれば、15日の移送の日は「こたみの御ありきの、例の様にありけれど」とあって、今度の行列は普通の外出のようにしたとあるから、やはり15日は遺体の移送日であって、27日が正式の葬送の日であったと考えられる。

15日には、靈柩車の輪に布が巻かれた。斉信娘はお産で穢れたまま亡くなったので、お湯で体が清められ

(嬉子の場合も同じであった)、お棺に入れられた。若い母親に続いて赤ちゃんも同じ棺に入れ、母親が懐に抱いたようにして寝かせられた(通常、子供が死去した場合は葬地に放棄される<sup>(64)</sup>)。そして、出棺の後、霊柩車の後ろには齊信と長家と死者に縁故の深い人々がこれに続いた。さらに、死者の母親(齊信妻、通常女性の親族は霊柩車の列には加わらない)が車に乗ってお供をした。女房達も車に乗ってお供の列に加わった。

遺体が移された法住寺では、27日に土塀が築かれ<sup>(65)</sup>、屋根には檜皮が葺かれた霊殿が造られた。そこに霊柩車を運び入れ、お棺を載せたまま車輪を外し、霊殿に納めた。安置された遺体がその後どのような処遇を受けたかについては明らかでない。

### おわりに

本稿は、「藤原道長家族の葬送・墓制・追善仏事の研究」の一部で、道長家族の葬送の基礎的な事実を記述した。追善仏事については別稿で発表予定である(『藤原道長家族の追善仏事について』(『比較家族史研究』第19号)。また、葬送の分析については「葬送における既婚貴族女性の地位について」で、墓制については「藤原道長家族の墓制について」で後日発表の予定である。

### 注

- (1) 栗原弘「藤原行成家族の葬送・追善仏事・忌日について」(『名古屋文理大学紀要』第4号, 2004年)。
- (2) 兼家の死去した場所は、『公卿補任』(永祚2年条)は「東三条第」としている。『栄花物語』(巻第3)も東三条第であった書き方がされている。『大鏡』(兼家)は法興院としている。兼家は出家の身であったから法興院で死去した可能性がある。どちらとも決しがたいが、ここでは『公卿補任』説に従っておく。
- (3) 『栄花物語』巻第3。
- (4) 『小右記』正暦元年7月9日条。
- (5) 『御堂関白記』寛仁元年2月27日条。兼家の墓は木幡にあった。
- (6) 道長の妻は、源倫子の他に、源明子がいる。明子についても葬式・追善仏事・墓地の史料を検証したが、ほとんど見つけることができなかったので、本稿では明子については言及することができなかった。

- (7) 『御堂関白記』寛弘3年10月11日、同7年9月29日各条。
- (8) この東山観音寺とは、かつて藤原緒嗣が建立した寺であったと推測される。ただし、緒嗣は式家の出身であり、穆子は北家の出身であるから、必ずしも同系統の寺であったわけではない。角田文衛「鳥部山と鳥部野」(『王朝文化の諸相』角田文衛著作集4, 法蔵館, 1984年) 349頁参照。
- (9) 霊屋については、田中久夫「玉殿考」(『祖先祭祀の研究』弘文堂, 1978年)、清水 擴「墓所堂としての仏堂建築—平安貴族の葬法と建築(下)—」(『日本建築学会計画系論文報告集』No.402, 1989年)、堅田修「王朝貴族の喪葬」(『古代学研究所研究紀要』第1輯, 1990年)、新谷尚紀「火葬と土葬」(林屋辰三郎他編『民衆生活の日本史・火』思文閣出版, 1996年)参照。
- (10) 『小右記』万寿4年10月28日条。
- (11) 『小右記』万寿4年12月2日条。
- (12) 『栄花物語』巻第30。宇多天皇の場合は『西宮記』12に「御棺先年所造構」とあって、亡くなる前の年に造られていた。
- (13) 『日本紀略』万寿4年12月7日条。
- (14) 『栄花物語』巻第30。
- (15) 『左経記』長元元年1月22日条に、御読経の料を寄せた人々が記されているが、その全てが出席者ではないから、正確な出席者はわからない。ただ、「事子刻院宮殿上(倫子)同車…」とあるから、倫子の出席は確認できる。
- (16) 『定家朝臣記』天喜元年6月11日条。
- (17) 『定家朝臣記』天喜元年6月22日条。
- (18) 『扶桑略記』承保元年10月6日条。
- (19) 加納重文「大谷」(『平安時代史事典』角川書店, 1994年)参照。
- (20) 『大鏡』裏書。
- (21) 『栄花物語』巻第39。『栄花物語』の現代語訳は松村博司『栄花物語全注訳』7(角川書店, 1978年)によった。以下同じ。
- (22) 『小右記』万寿4年9月14日条。
- (23) 『栄花物語』巻第29。
- (24) 『小右記』万寿4年9月14日条。
- (25) 『栄花物語』巻第29。
- (26) 『栄花物語』巻第29。
- (27) 『小右記』万寿4年9月17日条。『日本紀略』万寿4年9月16日条に「大峰寺前野」とあるが、こ

- の大峰寺については詳細不明。所在地は『今昔物語集』に「一条，西洞院」としているが，誤りか。
- (28) 納骨について、『栄花物語』は「御骨は，木幡僧都と宮の亮頼任と，木幡に率て奉りぬ」としている。これについて，松村氏は「木幡僧都」を「定基」とし，「尚侍嬉子が亡くなった時も木幡に骨を持って行った」とか，「このあたり，『小右記』には記事がなく，『左経記』には欠文になっているため，事実の検証ができない。しかし，運んだ顔ぶれからみて妥当と考えられるので，恐らく事実そのままと認めてよいであろう」としている（松村，注（21）前掲書6，86～7頁）。しかし，『小右記』には「辰時許権亮頼任持御骨向木幡，大僧正永円・御乳母子法師相副」と，明記されている。したがって，松村氏が「木幡僧都」を「定基」としているのは「大僧正永円」の誤りで，嬉子の死去の際骨を持って行った定基とは別人である。
- (29) 『扶桑略記』長元9年9月6日条。『栄花物語』巻第33。
- (30) 『栄花物語』巻第33。
- (31) 『山城志』（巻第5），『山城名勝志』（巻第13，上）。角田文衛「尚侍藤原淑子」（『紫式部とその時代』角川書店，1966年）527～8頁参照。
- (32) 『栄花物語』（巻第5）によれば，藤原伊周の母親の霊屋があったのは「桜本」であった。
- (33) 『日本紀略』長元9年5月19日条。
- (34) 『小右記』万寿2年8月5日条。『左経記』同日条。
- (35) 『小右記』万寿2年8月6日条。
- (36) 『左経記』万寿2年8月23日条。『栄花物語』では，魂呼をした人物は賀茂守道としているが，『左経記』・『小右記』の記録から中原恒盛（常守）とすべきである。松村，注（21）前掲書5，211～2頁参照。
- (37) 『小右記』万寿2年8月7日条。
- (38) 『栄花物語』巻第26。
- (39) 『栄花物語』巻第26。
- (40) 『小右記』万寿2年8月6日条。『左経記』同日条。『栄花物語』巻第26。
- (41) 『栄花物語』巻第26。
- (42) 『栄花物語』巻第26。
- (43) 『栄花物語』巻第26。
- (44) 『小右記』万寿2年8月16日条。『左経記』同日条。
- (45) 『小右記』万寿2年8月16日条。
- (46) 栗原弘『平安時代の離婚の研究』（弘文堂，1999年）117～8頁。
- (47) 『御堂閔白記』寛仁元年11月22日条。『百鍊抄』治安元年4月5日条。角田文衛「山井第」（『平安時代史事典』角川書店，1994年）2615頁。
- (48) 『小右記』万寿2年7月9日条。『左経記』同日条。『栄花物語』巻第25。
- (49) 『栄花物語』巻第25に「御車の後には院おはしませば」とある個所を，松村氏は「柩をのせた御車の後ろの座席」と解し，小一条院は寛子をのせた車に同乗していたと解釈している（松村，注（21）前掲書5，161頁。また最新の注釈書である小学館版『栄花物語②』1997年，484頁も同じ解釈をしている）。一方，『大日本史料』（2-21-328頁）万寿2年7月11日条は「小一条院歩ミ従ヒ給フ」と小一条院は歩いたと解釈している。これは，明らかに『大日本史料』の解釈が正しい。松村氏のいう霊柩車に遺族が同乗したとする見解はこの時代には考えがたい習俗である。また，『大日本史料』説が正しいことは，『栄花物語』に「院（小一条院）は故宮（城子）の御供にも，この女御（寛子）の御送もひたたけて歩ませ給ふ」とあって，小一条院は母親の葬送の際も，妻の葬送の際も歩いて従ったと記述されているからである。『左経記』万寿2年4月4日条に「小一条，并式部兵部卿宮，并帥左衛門督，大藏卿皆歩行喪葬云々」とある。
- (50) 『左経記』万寿2年7月11日条。
- (51) 松村，注（21）前掲書5，161頁。
- (52) 『栄花物語』巻第25に「院の御車に装束せさせ給ふ」とある。
- (53) 『中右記』寛治元年12月7日条。
- (54) 『小右記』は万寿元年1月6日。『栄花物語』は1月5日。
- (55) 『栄花物語』巻第21。
- (56) 霊柩車に布を巻きつけ装飾することについては，松村，注（21）前掲書4，513～4頁参照。
- (57) 松村，注（21）前掲書4，516頁。
- (58) 津本信博『更級日記の研究』（早稲田大学出版部，1982年）128頁。
- (59) 『栄花物語』巻第16。
- (60) 観隆寺という寺院については，堅田，注（9）前掲論文，32頁。また，藤原実頼の妻藤原能子の葬送がここで行われている（『日本紀略』康保元年4月13日条）。

- (61) 周知のように行成の外祖父源保光，母源保光娘の二人の遺体は，洛北の松前寺にあり，二人とも靈屋に納められていた（後に遺骨を鴨川に流した）。行成は，親しい血縁者が二人まで靈屋に納められていたので，自分の子供が死去した際，靈屋に納めることを発想するのは自然の成り行きであったと考えられる。栗原，注（1）前掲論文参照。
- (62) 『小右記』治安元年10月24日，11月23日，12月18日各条。
- (63) 『栄花物語』卷第27。
- (64) 『小右記』正暦元年7月13日，正暦四年2月9日各条。
- (65) 『栄花物語』では，15日の記事は明確であるが，27日の記事は明確に日付が施されていないために，はっきりしない。しかし靈屋に車ごと納められたと言う記事は，9月27日に行われた後冷泉の五十日のお祝いのすぐ直後に配置されているので，これらのことが27日に行われたことを示していると考えられる。そこで，本稿ではこれらのことが27日行われたとした。

